発達障害理解指導に関する小学校教員の認識 1

○西館有沙¹・水野智美²・徳田克己²

(¹ 富山大学・² 筑波大学)

キーワード：障害理解、発達障害、小学校

Awareness of Teachers for Education to Understand Special Needs of Developmental Disorders in Elementary School

Arisa NISHIDATE¹, Tomomi MIZUNO² and Katsumi TOKUDA²

(¹ Toyama Univ., ² Tsukuba Univ.)

Key Words: Understanding Special Needs, Developmental Disorders, Elementary School

目 的

現在、発達障害のある子どもが小学校や中学校の通常学級に多く在籍していることが明らかになっている。通常学級に在籍する発達障害児への指導のあり方について検討している先行研究は多い。一方で、彼らがクラスの活動や仲間とのコミュニケーションに困難をもつケースがあることも報告されている。子どもたちの発達障害に関する理解をいかに促進するかを検討することが求められていると言える。

そこで、昨年度は市民（幼児期の子どもから成人者まで）の発達障害に関する認識を明らかにした。今年度は、教師を対象に発達障害理解指導に関する認識を調査し、これらの結果をもとに障害理解教育の内容を検討する研究プロジェクトを進めているところである。本稿ではそのうち、小学校教員に対して行った調査の結果について報告する。

方 法

小学校 100 校の教員 1000 名に対して、2011 年 3～4 月にかけて無記名式・自記式の質問紙調査を配布し、18 校より 187 部を回収した（回収率 19%）。質問紙は郵送法を用いて配布、回収した。対象者の年齢は 20 歳代が 12 名、30 歳代が 38 名、40 歳代が 82 名、50 歳代以上が 55 名であった。

結 果

これまでに発達障害児（障害の疑いのあるケースを含む）を担当した経験について尋ねたところ、あると回答した者が 89% を占めており、ほとんどの教員が発達障害児を受け持った経験を有していた。担任した子どもの障害は ADHD が最も多く（担任経験がある 166 名のうちの 72%）、アスペルガー障害（57%）、自閉症（52%）、LD（45%）、知的障害（37%）が次いだ。

これまでに発達障害児に関して他児から指摘や疑問が挙がったことはあるかを選択式で尋ねたところ、教員に対して「（発達障害児）が～してくる」と言ってきたケースが 42% と最も多く、次いで、発達障害児本人に対して「～してはいけない」と言うケース（25%）、教員に対して「どうして（発達障害児）は～するの」と問うケース（20%）、発達障害児本人に対して「どうして～するの」と問うケース（6%）であった。また、発達障害児への教員の対応について、子どもから指摘や質問を受けた経験があるかを尋ねたところ、あると回答した者が 11% いた。その内容は、「（発達障害児）だけ～しなくてずい」「先生は（発達障害児）に甘い」「なぜ注意しないのか」などであった。これらの疑問に教員が答えた後の子どもの反応については、「納得した様子であった」「話の内容は理解した様子であった」「納得できない様子であった」に分かれた。

発達障害児のことを他児が理解する必要性を、どのような時に感じるかを選択式で尋ねた。クラス内で障害児を無視し

たり攻撃したりする子どもが出てきた時（全体の 73%）、クラス内で障害児の言動に疑問をもつ子どもが出てきた時（63%）などと回答した者が多く、クラスに障害児が所属しているかどうかや問題の有無にかかわらず理解は必要と答えた者は 42% にとどまった。なお、発達障害理解を促す必要性を感じないと答えた者は 1%（2 名のみ）であった。

担当学年において、発達障害児について他児に話す際に感じるむずかしさとは何かを、現在通常級の担任および学年主任をしている教員 162 名に尋ね、その結果を担当している学年ごとに分けた（表 1）。学年に関係なく「自らが話題になることに障害児が傷つく可能性がある」ことや「子どもが理解できない」ことを心配する教員が約 3 割いた。また、「子どもが納得できない」と考える教員が 26%、「保護者から口止めされる」と考える教員が 24%、「いじめ等が起きる」と考える教員が 23% いることが確認された。学年によって回答に差があるかを確認するため、3×2 の χ^2 検定を行ったところ、いずれの項目においても有意差は認められなかった。

考 察

小学校教員の多くは発達障害児もしくはその疑いのある子どもを担当した経験をもっていた。また、ほとんどの教員が発達障害児について他児の理解を促す必要性を感じていた。これは、他児から発達障害児のことについて指摘や疑問を受けた経験などによると考えられる。

ただし、多くの教員は、発達障害児とクラスの他の子どもたちとの間に何らかの問題が起こった際に指導をする必要があると答えており、発達障害児がクラス内にいるかどうかや問題の有無にかかわらず理解を促す指導が必要と考える者は半数に満たなかった。発達障害について子どもに伝えることのむずかしさが影響していると推察される。

表 1. 発達障害児について他児に話す際に感じるむずかしさ

	低学年 <i>n</i> =61	中学年 <i>n</i> =56	高学年 <i>n</i> =44	全体 <i>n</i> =162
障害児が傷つく	36%	30%	32%	33%
子どもが理解できない	36%	29%	27%	31%
子どもが納得できない	25%	30%	23%	26%
保護者から口止めされる	25%	21%	27%	24%
いじめ等が起きる	18%	25%	30%	23%
教員が正確に説明できない	8%	13%	7%	9%
効果が不明である	8%	9%	11%	9%
その他	8%	16%	9%	11%